

大東文化大学図書館所蔵周作人手稿  
「人境盧詩草」について

— 周作人の周辺から —

小 川 利 康

On Zhou zuo-ren (周作人) 's Ms. "Renjinglushicao"  
(人境盧詩草)"

Toshiyasu Ogawa

目 次

発端——草稿の発見

1, 周作人と黄遵憲——知日派の苦悩

2, 大河内文書に携わった人々

(1) 実藤惠秀氏と大河内文書

(2) 実藤惠秀氏と鄭子瑜氏

3, 鄭子瑜氏と周作人の接点

結語に代えて

中文提要 (SUMMARY)

这次经过调查发现·周作人《人境卢诗草》手稿的原主是位香港中文大学的(中国文化研究所)郑子瑜教授。原来郑教授在蔽校作客座教授时,作为纪念捐送过不少近代名人手书,有名的《周作人自筆年譜》也包括在内。遗憾的是:当时周作人还没有受到应有的评价,加之大东文化大学图书馆还处于初创期,故手稿没能引起重视,使之与《大河内文书》混在一

处。届于中日修交二十周年，蔽校建立七十周年之际，小文试图介绍蔽校接受周作人手稿前后之中日学者交流情况，与以澄清。

## 発端——草稿の発見

91年の秋頃，外国語学部寺村政男助教授より，東松山の図書館に周作人の直筆原稿が有るらしいと教えられた。早速図書館貴重書資料室に赴き，お願いして見せていただいたところ，「人境廬詩草」と題された原稿であった。図書館（東松山図書課）課長補佐・吉江一徳氏のお話では，同氏が大河内文書の整理中に最近発見されたもので，詳しい来歴については調査中とのことであった。

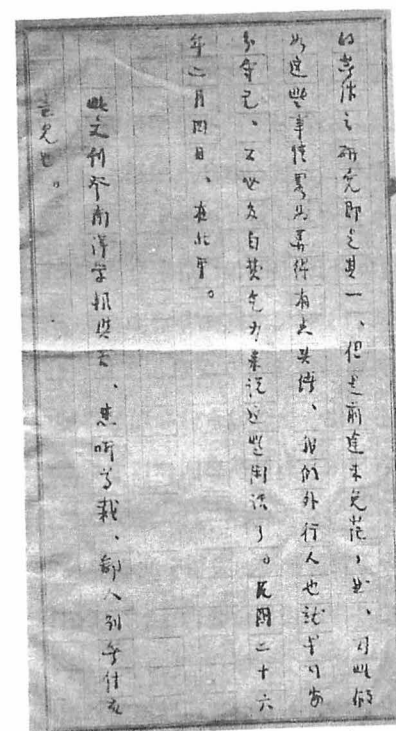
この原稿は，『日本雑事詩』で有名な知日家の清末詩人・黄遵憲の詩集『人境廬詩草』の各種版本を検討した一文で，解放前の1937年2月4日に雑誌発表された<sup>1)</sup>。手稿（書影別掲）の体裁は，縦25cm，横15cmの和紙にやや薄くかすれた青い罫線が入ったもので，市販品とおぼしい。周作人自身によるものか，白い紙で原稿の背中を綴じてある。なお，単行本に見える〔付記〕が欠落していることから，一番最初に書いた原稿であると考えられる。初出誌である雑誌『逸経』は未見だが，〔付記〕は雑誌発表年月日より早く，雑誌発表の段階で既に付されていたと考えられ，別紙に書かれた〔付記〕は，雑誌社に送付された段階で失われた<sup>2)</sup>と推測される。

この周作人手稿と共に館蔵されている大河内文書とは，明治初期（1875～81年）<sup>3)</sup>の華族・大河内輝声と来日中の中国知識人との筆談録である。中には黄遵憲との筆談も含まれ，この文書と周作人手稿がともにあるのは故なきことではない。ただ，明治期の日本側の資料と中国人作家の原稿が，ひとところにあるのは，やはり奇遇というべきであろう。

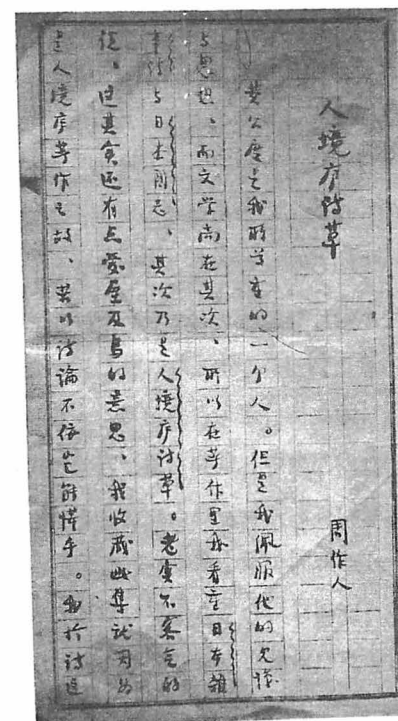
周作人の草稿は一般に殆ど修正の無い浄書原稿に近く，今回見つかった

草稿と現行のテキストとの比較は余り意味をもたない。だが，限られた個人や機関のみにしか存在しない筈の草稿が何故東松山図書館に納まるに至ったのか，少なからず興味を覚える。本稿では，周作人手稿と大河内文書双方の来歴を調査し，それらにまつわる人間模様を記して，学園創立70周年・日中国交回復20周年記念のしるしとしたい。（文中で用いる年号は叙述の便宜上西暦下ふた桁で示した。）

## 最終葉



## 第一葉



## 1, 周作人と黄遵憲——知日派の苦悩

一見したところ、この「人境廬詩草」の内容には、作人の当時の心情を窺わせるものはない。黄遵憲の詩集『人境廬詩草』の版本検討するだけの淡々とした文章である。だが、30年代以降、周作人は日本を論じる際にたびたび黄遵憲に言及しており、破局を迎えていた日中関係を文中でも少なからず意識していたことは疑えない。発表誌である雑誌『逸経』自体（37年3月5日・第35期）、戦火拡大の中で、翌号36期を最後に他誌と併合<sup>4)</sup>していた。

この原稿と前後して書かれた「日本管窺之1～4」（四篇）は日本留学の回想も織り交ぜながら、日本について語ったもので、その頃の周作人の苦衷が随所に窺われる。文中、周作人が繰り返し語るのは、繊細な日本文化と現実の日本の醜悪な姿との懸隔の大きさであった。無論、30年代になって明らかになったことでない。「日本管窺之三」（35年12月）で、15年前発表の「親日派」<sup>5)</sup>を改めてほぼ全文引用していることにも示されている。「親日派」は五四運動の中で起きた日本製品排斥運動に反対して書かれ、盲目的な排日運動自体が日本——特に日本文化——への十分な理解に基づくものでないと批判する一方で、所謂「親日派」も日本を同様に理解していないと批判している。

中国が深く憎み、日本が歓迎している親日派は、名利を漁る小人で、中国に対しても日本に対しても有害で、中国の利益を損う一方で、日本の栄誉を損っている。

一国の栄誉は、その文化——學術と芸術にあり、その植民地の利権や武力にはないどころか、そんなものは本来の栄誉を損う重荷になりさえすると考えられる。<sup>6)</sup>

ただ、35年時点での周作人は、以上の引用に付け加えて、「ここで述べることは全て正しいとは言えないにせよ、親日派への説明はいまでもそう思うので引いた」と述べており、かつての考え方に対して少々見方を保留せざるを得ない事態まで日中関係は悪化していた。日中戦争の戦火が全面化を目前に控えていた時期である。周作人の日本観は、「日本管窺」の回を重ねるごとに苦澁を深め、最後は自己の日本理解の破産の告白をもって終る。文中、確信に満ちた15年前の「親日派」批判は姿を消し、江戸の浮世絵に純粋な関心を抱く在日留学生からの手紙に寄せて、次のように語っている。

他国の文化を理解するのは、もとより難しく、実に寂寞たる仕事だ。平生過去の文化にばかり目を奪われ、うつとりしているが、現実世界は往往にして同じでないどころか、正反対であり、矛盾、失望の味わわせられるのだ。実際、これは怪しむほどのことではない。一つには、今と昔は違う。また、多寡が違う。世の中の貴いものは、そもそも何時でも有るものではないのだから、（中略）。<sup>7)</sup>

自分の日本理解が現実世界では何等有効性を持ちえない無力感は既に掩うべくもない。この苦衷と清末以来の日本理解に努力を重ねてきた黄遵憲への関心とは、切り放して考えることは出来まい。草稿の中で「黄遵憲は私が尊敬する一人である。しかし私が敬服するのは彼の見識と思想で、文学は二の次で、（以下略）」と述べるのも、そうした理由からであろう。さきほども述べたように、手稿「人境廬詩草」にはテキストの比較が中心で、周作人の如上の苦衷と直接切り結ぶような言葉は見出せない。しかし、この手稿の〔付記〕では、黄遵憲著『日本国志』に寄せる梁啓超の序文を次のように引く。

中国人は日本を殆ど知らぬ。黄公度〔遵憲〕が著した『日本国志』を梁啓超（わたし）は読んで喜び感嘆して言った。「これで日本がわ

かった、これで日本が強いわけがわかった、黄さんのお陰だ。また、憤激して黄さんを責めた。「これで中国がわかった、これで中国が弱いわけがわかった。黄さんは本を書き上げて10年も謙遜して公にせず、にいたため、中国人は日本を殆ど知らず、備えも憂いもないままに、今日に至ったのだ。」<sup>8)</sup>

また、『日本国志』が日清戦争以前に刊行されていたら、賠償銀2億は払わずにすむから、銀2億に値する<sup>9)</sup>という記事などを引き、黄遵憲の見識の高さを改めて賞賛している裏には、日本への理解（むしろ警戒心、備えと言った方が正確だろうが）を怠ったがために、かつてきた道を今また歩もうとしているという周作人の感慨を読み取ることは十分可能であろう<sup>10)</sup>。それは、知日派としての周作人の理論的破産であり、また一面では全面戦争に入る前の段階での絶望に満ちた中国必敗論であった。「人境盧詩草」を草した数日後、「明朝之亡」と当初題して発表した文章<sup>11)</sup>では、明末の官吏達の腐敗ぶり抄録していることから、その心情は読み取れよう。

日本文化は論じられても日本の国民性は結局謎めいて理解できぬ、となれば多くの実際の問題についても論じようがなくなり、文化も（単なる）清談に過ぎなくなる。分らないと言明したからには、私の日本管窺もこれにて終わりとするのがよからう。<sup>12)</sup>

最後の「日本管窺之四」は笑いに紛らわせて、文章を締めくくっているものの、その暗さには変わりはない。掲載誌の『国聞週報』14巻25期（37年6月28日）は、ちょうど盧溝橋事件にぶつかり、実際には読者の目に触れることさえなかった<sup>13)</sup>。淪陷期にも日本への顧慮のためか、単行本に収録出来ず、解放後やっと『知堂乙酉文編』に収められるという命運を辿った。単行本収録に際し、これまでの「誤った認識」を改めたので「再」を冠したという「日本之再認識」<sup>14)</sup>とを併せて、「日本研究の店仕舞いをした」ものと述べているのは、そうした事情を物語るものである<sup>15)</sup>。

## 2、大河内文書に携わった人々

### (1) 実藤恵秀氏と大河内文書

周作人の黄遵憲論は、当人の苦衷とは係わりのないところで意外な反響を呼んだ。戦中、早大高等学院教授であった実藤恵秀氏（故人）は、周作人「日本雑事詩」（『逸経』第3期、35年4月）で『日本雑事詩』定本の存在を知り、閲覧を依頼してきた。当時実藤氏は、黄遵憲の『日本雑事詩』（故豊田稷氏と共訳・生活社43年刊）翻訳書刊行の準備を進めており、日本では入手不可能だった定本を是非とも一見したいと希望していたのである。同じ中国文学研究会のメンバーであった故竹内好氏が、ちょうど北京留学（37年10月～39年10月）を予定していたため、その竹内氏を通じて、運よく周作人から定本を一冊譲り受けることが出来た。

当時、無名に近かった二人の懇請が周作人に快く容れられたわけで、生活社版の「あとがき」で、その経緯を詳しく紹介し、貴重な定本を入手した喜びを語っているのも無理からぬところであろう。この定本を介しての結びつきは、後の大河内文書研究で再び意味をもつことになる。

生活社版『日本雑事詩』翻訳刊行後、実藤氏は大河内文書を遺した大河内輝声の子息・輝耕氏に同書を献呈している。とはいえ、当時は大河内文書の存在は全く知られておらず、大河内家の菩提寺・平林寺にある黄遵憲詩碑（『日本雑事詩』最初稿塚）の存在を知るのみであった。実藤氏は、大東文化学院（当時）教授・鈴木由次郎氏の論文<sup>16)</sup>で、詩碑の存在を知り、鈴木氏から提供を受けた詩碑拓本を翻訳書の見開きに掲載したため、その答礼としての献本に過ぎなかったのである。ところが、この翻訳書が、輝耕氏から大河内文書の存在を初めて知るきっかけとなった。43年秋に平林寺を訪問した際、実藤氏は「ひとたばの筆談の紙」を予想していたが、平

林寺の庫裡で見つけたのは、至るところ紙魚に食い荒らされた73巻に上る膨大な筆談録の山であった。

意外な発見に驚いた氏は、ともかく資料の保全も兼ねて筆談録の浄書に取り掛かった。発見の後にも戦時下の混乱などで散逸し、実藤氏の浄書ノートだけという文書もあり、困難な時代での氏の努力は貴重なものであったと言える。

戦争末期、氏は何度かエッセイ風到大河内文書を紹介されている。「盡忠報國」をうたう詩や学徒出陣、勤勞奉仕の学徒に捧げる言葉で埋った紙面に「明治10年ころといふ日支文化交渉史上、おもしろい時代のこと」<sup>17)</sup>を語るだけでも、かなりの勇気を必要としたであろう。後にこの頃を回想して「明治時代の日中両国人の 信頼しきった あたたかい ふんいきをのぞきみると いつのまにか 戦争をわすれ すき腹をわすれることができたのである。」<sup>18)</sup>と語っておられるが、逆に言えば、そうした研究しか許されない状況でこそ可能だった実に地道で報われない作業とも言える。これより実藤氏の大河内文書研究が始まり、一応の完成を見る『大河内文書』(前掲書)まで、実に20年に及ぶ息の長いものであった。その完成を見るには、周作人の紹介を受けた鄭子瑜氏の登場を待たねばならなかった。

## (2) 実藤恵秀氏と鄭子瑜氏

空襲のなかで始まった大河内文書の研究は、実藤氏の多方面にわたる活躍の中で、戦後必ずしも順調に進まなかった。しかし、浄書整理の作業だけは、依然続けられていた。氏の回想によると、敗戦後も45年10月、46年8月、最後には48年3月と何回かに分けて平林寺から筆談録を借用しては浄書整理を進めていた。当初、氏に対して、早稲田大学の図書館への寄贈の申し出もあったようだが、最終的には、大東文化大図書館が受入れることに決まった。その際、実藤氏が借りだしていた17冊だけは、氏の勤務先

である早大の方へ分蔵する承諾を受け、大体2/3が大東、1/3は早大へ所属する結果となった。しかし、従来の保存が悪かったため、一層の劣化を恐れた氏は早大図書館の協力を得て、58年11月に大東・早稲田双方全巻をマイクロフィルムに収めた<sup>19)</sup>。

資料の保全はこうして怠りなく進んだものの、本格的な資料の検討は余り進展を見なかった。そこに61年春、鄭子瑜氏より同氏の編になる『人境盧叢考』<sup>20)</sup>が届いた。これは従来の黄遵憲論文を収録したもので、かつて実藤氏が『日本雑事詩』定本の存在を知るきっかけとなった周作人「日本雑事詩」、更に「人境盧詩草」が収録されている。この後始まった二人の文通で、大河内文書の存在を知った鄭子瑜氏は来日して、調査研究に協力することになり、氏の黄遵憲研究に転機が訪れることになった。

ここで、鄭子瑜氏の経歴の一部を紹介しておく必要がある。氏は、福建省出身の1916年生まれ、解放前には、雑誌『逸経』などに執筆されており、周作人とは直接面識がないものの全く知らない間柄ではなかったと思われる。後述のように『人境盧叢考』編集で両者の交流は密接なものとなり、訪日の際に鄭子瑜氏は周作人に依頼して、紹介状を関係者宛に出してもらっている。実藤氏自身のほか、当時早大に在職中であった周作人研究者・松枝茂夫氏も数通の紹介状を受け取っている<sup>21)</sup>。なお、訪日当時鄭氏はシンガポール師範大教授の職にあった。

訪日は62年、64年の計2回にわたり、1回目の来日の際に研究計画を話し合い、黄遵憲の筆談の箇所をひとたびシンガポールに持ち帰り、2回目の来日の際には、早大語学教育研究所の客員研究員として10ヵ月滞在し、最終的な編集作業を行った。64年5月刊行の『大河内文書』は、この作業の成果なのである。この際、同書の読者の知らせで、行方不明だった大河内文書の一部が新たに見つかっている。更に翌65年5月には原文稿を完成、68年5月にシンガポールで刊行された。

この鄭子瑜氏が大東大東洋研究所に客員教授として着任されたのは78年のことである。恐らく大河内文書所蔵のことがあつての御縁であろう。これより2年間主に「中国修辞学研究」を講じられ、退任される際に少なからず蔵書を大学に寄贈されている。先年、内山知也先生が紹介された<sup>22)</sup>周作人自筆年譜も寄贈書の一つである。従って、大東大にある周作人自筆の原稿は鄭子瑜氏の寄贈に係るものである可能性は最も高いといえよう。

### 3. 鄭子瑜氏と周作人の接点

鄭子瑜氏来日に際し、周作人からの紹介があつたことは前述の通りだが、両者の直接の交渉の契機も、黄遵憲研究においてであつた。複数の文章で氏自身次のように語っておられる。

私と周さんは何の縁故もなく、20数年前に2人とも『逸経』半月刊に書き、お互い黄遵憲の『人境盧詩』が好きだというだけで知り合った<sup>23)</sup>。

というもので、密接なものではなかつた。鄭子瑜氏からすれば周作人という名前は早くから知っていたであろうが、周作人の側からすればせいぜい覚えていても名前程度かと思われる。いずれにせよ、直接の交渉が生まれたのは、鄭子瑜氏が文献を求めて周作人に手紙を出した解放後の五八年のことであつた。

鄭子瑜氏は、書面でこれまで作った旧詩を出版させてもらいたいと周作人に願い出る<sup>24)</sup>と同時に、旧作の「人境盧詩草」で取り上げた黄遵憲の文献についても問い合わせたらしい。

周作人の側は返信を58年1月、7月の2回認めた後、同年10月には旧作の清書を鄭子瑜氏宛に送ったほか、61年には更に『知堂雜詩抄』の原稿も送っている<sup>25)</sup>。この浄書原稿は書影が『人境盧叢考』の扉に掲載されている。浄書原稿を実見してはいないものの、大東本と比較すると、〔附録〕

が欠落している点、栄宝斎の原稿用紙を使い、原稿の最後には「1958年10月11日抄畢 周知堂（この箇所は印章）」と記してある点で明らかに別物である。

しかし、鄭子瑜氏が周作人から直接譲与されたものではないとすれば、大東は別の経路から入手したということになる。これは奇縁といえよれまでだが、日本に現存する周作人の自筆原稿は周作人に早くから関心を寄せてきた一握りの個人・研究機関にしか存在しない。つまり、偶然入手し得るといった性質のものではないのである。ここで答えの鍵となるのが、大東本の最後に付け加えられた発表テキストと唯一の異同箇所である。

此文刊登南洋學報與否，悉聽尊裁，鄙人別無什麼意見也。（この文を『南洋學報』の掲載は、すべてお任せいたします。私は別段意見はありません。）

『南洋學報』はシンガポールで戦前から刊行されており、これだけでは決め手とはなりにくいだが、当の鄭子瑜氏が60年代当時つまり、周作人との交流が始まった頃に同誌主編を務めていたとなれば、鄭氏に宛てて記された言葉であることは疑えない。とすれば、考えにくいことではあるが、鄭氏は自著の巻頭に掲げた周作人の自筆清書原稿のほかに、雑誌掲載の底稿をも贈与されており、大東には二部ある周作人の草稿のうち底稿の方を贈与したとしか考えられない。常識的に考えて、浄書二種類送った可能性よりは高いであろう。

この推測が正しいとすれば、この大東大所蔵の手稿は周作人自筆年譜と併せて鄭子瑜氏の寄贈に係るものであると考えられ、自筆年譜は本来『知堂雜詩抄』刊行時に付されるべく準備された原稿と想像されるのである。ただ、こと当初の予定と異なり、20年後に刊行されたため、実際年譜を付録として付ける意味は全く失われてしまったのではあるが。

ここまで調査を進めた段階で、勇を鼓して鄭子瑜御本人に問い合せてみ

たところ、事実間違いない旨の御返事をいただいた。また、当然のことながら、同時に図書館の整理不備を不満とするお言葉をいただいたのも残念ながら報告せねばならない。

## 結語に代えて

以上で、本稿の目的であった周作人手稿が大東大図書館に収蔵されるに至った経緯はほぼ明らかになった。そもそもの出発点は経緯を明らかにする点にあったのだが、結果的に興味を引かれたのは、むしろ作人の黄遵憲論の広がりであった。鄭子瑜氏にせよ、実藤恵秀氏にせよ、今日に於ける黄遵憲研究の開山祖とも言うべき存在である。周作人との接点からそれぞれ出発し、再び作人を介して出会った両氏の研究史は、あの時代の中での周作人の存在の大きさを示すものと言えよう。

最後に、草稿の第一発見者である吉江一徳氏には、小文の執筆に当たり多々ご協力頂いたことを記し、改めてお礼申し上げます。(1992・12・19稿)

## 注

- (1) 現在、単行本『乗燭談』(岳麓書社89年10月刊)所収
- (2) 初出誌の「逸経」は未見で、雑誌からの孫引きだけしか確認していないが、〔付記〕は雑誌発表年月日より早く、雑誌発表の段階で既に付されていたようだ。
- (3) この推定は実藤恵秀編訳『大河内文書』(平凡社64年5月刊・東洋文庫18)「一、桂林荘の主人」に拠っている。
- (4) この後、『宇宙風・逸経・西風非常時期聯合旬刊』に改められ刊行されたが、37年8月～10月まで短命に終わった。
- (5) 『談虎集』(岳麓書社89年1月刊)所収、20年10月発表
- (6) 『風雨談』(岳麓書社87年7月刊)所収「日本管窺之三」

- (7) 『風雨談』「日本管窺之三」
- (8) 『乗燭談』「人境廬詩草」〔附記〕
- (9) 『風雨談』「日本管窺之三」による。この箇所は錢萼孫が編んだ年譜からの引用だが、解放後改編されたものしか参照できなかった。改編後のものとは大分異同がある。
- (10) この付記自体は『日本国志』は黄遵憲の作ではないとする風説への反論の形をとって述べられている。
- (11) のち、単行本『乗燭談』収録時には「茨村新樂府」に改題して収録。
- (12) 後に『知堂乙酉文編』(香港三育圖書文具公司61年初版・上海書店85年7月影印)所収
- (13) 『国聞週報』総目(三聯書店80年12月重印)に同号の目次は掲載されているが、周作人『知堂回想録』「一七四、日本管窺」には事実上刊行されなかった旨説明されている。
- (14) この文章では、かつて永井荷風の「江戸芸術論」に共鳴して、日本と中国が共有する「東洋人の悲哀」を感得したとことがあったが、後になって「余り当てにならぬ」ことに気付いたと語っている。従来の文化主義的日本理解が現実的には無力であったという自覚を裏付けるものであろう。
- (15) この点については既に木山英雄氏『北京苦住庵記』(筑摩書房78年3月刊)で詳述されている。
- (16) 『大河内文書』(平凡社64年5月刊行・東洋文庫18)での実藤氏の指摘にもとづいて調査したが、『大東文化』(昭和13年12月掲載という)のバックナンバーには上記の記事を発見できなかった。当時大東文化学院は學術論文誌として『大東文化』を刊行していたほか、新聞版『大東文化』も刊行していたようで(『大東文化』での記述による)、これらの未見部分にあるかもしれない。
- (17) 『早稲田大学新聞』廃刊号(44年5月27日)「筆談萬歳」
- (18) 『大河内文書』(前掲書)による
- (19) この点については早稲田大学図書館刊きねとう けいしゅう「収書摘報大河内文書のこと」(刊年失記、恐らく64年6月4日に行われた大河内文

書贈呈の直後のものと思われる)

- (20) シンガポール商務印書館59年7月刊。同書は、黄遵憲関連の研究論文を鄭子瑜氏が集録したものである。
- (21) 鄭子瑜・実藤恵秀編『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』(早稲田大学東洋文学研究会68年5月刊)所収の実藤氏序文ほか松枝氏書簡を参照させていただいた。
- (22) 『東洋文化』(大東文化大学東洋研究所)40号所収
- (23) 『知堂雑詩抄』(岳麓書社87年1月刊)鄭氏跋文による。
- (24) この宿願は87年に『知堂雑詩抄』(前掲書)で実現した。
- (25) 『人境廬叢考』所収序文及び附録の周作人返信による。また、『知堂雑詩抄』周作人「知堂雑詩抄序」の日付は61年4月20日となっているのに拠る。

## 場所名詞における若干の問題点

高橋 弥守彦

Some Problems Concerning "Place Nouns"

Yasuhiko Takahashi

### 梗概

以前、不少人写过有关处所词的文章，但笔者认为其中有些问题值得商榷。现在我就以下四个问题谈谈笔者的看法。

第一，本人很难同意赵元任先生所说的“门那儿，张家，我这儿”是词。

第二，也很难同意赵元任、施关淦二位先生所说的“省里，黑板上”是词。

第三，也很难同意赵元任、朱德熙二位先生所认为的“背后”是位置词(赵)或方位词(朱)。

第四，也很难同意赵元任先生说的“别处”是位置词；施关淦先生说的“旁边”是方位词。

之所以会产生这些问题，是因为这些先生过去把这些词带为一类——处所词。本文试图从词汇意义、语法现象和语法规则3方面把这些词分为处所名词和处所短语两类。

## Contents

|                                                                                                                                       |                         |     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|-----|
| The second paper on the LiPo's "Jing ye si" .....                                                                                     | Hirofumi Kadowaki ..... | 1   |
| Concerning Shu (書) of Meng Tzu (孟子) .....                                                                                             | Nobuyasu Kurata .....   | 25  |
| A Study of the conceptual Formation of the Idea of Lü (律) and<br>Scientific Thought in Ancient China<br>.....                         | Keisuke Kurihara .....  | 45  |
| Is the Title TIANWEN(天問) A Word of Ancient CHU(楚) Origin<br>Translated into Chinese? .....                                            | Shigehiko Kurosu .....  | 63  |
| The Relation between the Hand-written Copies and the Printed Books<br>—The Ming Race's Faulty Revision toward the Old Books—<br>..... | Taneshige Harada .....  | 85  |
| On the Hsia Dynasty and Erlitou Culture<br>— with Special aspect of the Dongxiafeng Remains —<br>.....                                | Atsushi Yoshida .....   | 113 |
| Charlemagne's educational policy — Intellectuals invited<br>to Carolingian Empire — .....                                             | Kiyota Iwamura .....    | 123 |
| The Angelology of Joseph Gilbert .....                                                                                                | Kenji Takao .....       | 147 |
| A Study of "Shou - yang Er zi 首陽二子" in the Japanese literature<br>.....                                                               | Toshiaki Fukuda .....   | 167 |
| TAI-JI and MIND .....                                                                                                                 | Yang Ming-Shi .....     | 191 |
| ☆                                                                                                                                     | ☆                       |     |
| Some Hints Brought from "The Idea of a University"<br>by John Henry Cardinal Newman .....                                             | Junji Nagasawa .....    | 1   |
| Agnes Grey: Confession by a Cinderella .....                                                                                          | Michiko Kurisu .....    | 15  |
| Two Gallants and the World of Betrayal .....                                                                                          | Yoshihide Kawano .....  | 31  |
| On Caryl Churchill's <i>Top Girls</i> .....                                                                                           | Reiko Takasugi .....    | 47  |

## 編集後記

大東文化大学創立七十周年記念事業の一環として記念論集を編集することになり、編集委員会が設けられて分担し、編集方針を作成の上、その任にあたることになった。

記念論集は三分冊となり、七十周年記念にあさわしいものとなった。それぞれの執筆者の諸先生の氏名は本文中に記したとおりである。事務的な処理等については記念事業事務室長の佐藤邦宏氏の手をわずらわせた。記して謝意を表したい。専門分野等の関係もあり、限られた時間で作成しなければならなかったため、また執筆者の原稿を忠実に配慮した関係上若干の不備が残った点はお詫びしなければならない。本論集を通じて、七十周年記念事業の焦点がどこにあてられていたか、その要諦が解明されるものと確信している。関係各位の尽力によって記念論集が編集・刊行できたことを喜ぶとともに、ご執筆していただいた諸先生に衷心より感謝申し上げる次第である。

大東文化大学創立七十周年  
記念論集編集委員会  
委員長 前川邦生

## 大東文化大学創立七十周年記念論集(上巻)

一九九三年九月二十日

編者

大東文化大学創立七十周年  
記念出版推進委員会

発行者

委員長 濱 久雄  
学校法人 大東文化学園  
理事長 鈴木武夫

発行所

学校法人 大東文化学園

七十周年記念事業事務局

175 東京都板橋区高島平一丁目九番一号

電話 〇三―五三九九―七三〇七 (ダイヤルイン)

印刷 トーコー印刷株式会社